ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第31号
仙台市博物館
市史編さん室

大年寺山での茶摘み風景
大正5年(1916)ころ
(個人蔵)

若林区今泉に残る、茶の生け垣
平成23年撮影

モノがたり 仙台

お茶どころ仙台

農産物の産地は、時代によって変わっていく場合があります。宮城県の農産品の代表格である米もその例に漏れません。かつて仙台藩産の米は、江戸では1割前後の大きなシェアをもってはいたものの、品質面での評価は中以下でした。現在、高品質で知られる新潟の米も、100年前までは質が悪い米という評価だったのです。宮城米も新潟米も、品質面で高く評価されるようになるのは戦後のこと。そんなに古いことではないのです。

逆に、かつては日本有数の産地だったのに、現在では大きく生産量を落としているものもあります。宮城県では茶がその代表格です。明治時代前期、宮城県は茶の生産量が府県別の上位常連で、明治6年(1873)には4位になっています。もっとも、宮城県、特に仙台での茶の生産は、他の地域と少々違うところがありました。江戸時代後期、仙台藩の特産物奨励政策によって茶の生産が奨励され、仙台周辺でも大年寺山の山裾に広大な茶畑が作られました。同時に、こうした茶畑とともに、仙台における茶の生産の相当部分は、実は街の中にあったのです。仙台城下の7割以上の面積を占めた武家屋敷が、その場所でした。

仙台藩は藩士たちに広い屋敷を仙台城下に与えました。その面積は、100石どりで420坪、500石で900坪が基準とされていました。その広大な屋敷の中には菜園が作られ、またたくさんの樹木が植えられて、「杜の都」の原風景を作り出していたのです。そうした武家屋敷では、門から玄関に続く通路に沿って、あるいは庭の一角に、茶の生垣を作るのが一般的でした。このような武家屋敷の茶樹の葉を買い集める仲買人が、明治時代のある時期までは、初夏の仙台の街中を大きな籠を背負って歩いていたそうです。しかし明治以降、武家屋敷がだんだんと少なくなり、また静岡などで大規模に茶の生産が行われるようになると、もともと茶の生産地としては北限に近かった宮城の茶の生産は急速に衰えてしまいました。

仙台藩を築いた伊達政宗は、茶の湯を好んだことでも知られています。政宗は折々に、付き合いのある大名や旗本、幕府関係者や公家などにさまざまな贈り物をしましたが、その中に「山の寺の茶」がありました。「山の寺」とは、現在の泉区山の寺にある古刹・洞雲寺のこと。山がちの洞雲寺付近は茶の栽培に適していたのでしょうか。少なくとも政宗が贈り物に使うくらいですので、「山の寺の茶」は政宗自慢の逸品だったことは間違いないでしょう。

政宗が晩年に住んだ若林城の北西約1kmの場所には、藩の茶畑があり、いまも地名は「元茶畑」。仙台城内に酒蔵を作った政宗ですから、茶についても、自分の住む所の近くで作らせようとしたのかもしれません。

歩いて実感 仙台の歴史 ――『仙台市史 特別編9 地域誌』さきどり企画

せんだい地域誌さんぽ その3

～若林区にまつわる あれこれ編～

仙台随一の平野地帯、若林区。
豊かな水と沃野に育まれ、
人びとは長い歴史を積み重ねてきました。
そんな時代の層を一枚二枚とめくって、
昔の景色を眺めてみましょう。

1 若林城の影響 ― 愛宕上杉通

現在は宮城刑務所の敷地となっている若林城跡。若林城は伊達政宗晩年の居城で、没後に廃城となりましたが、近年の発掘調査によって、その内部構造はもちろん、周囲に広がっていた武家屋敷などからなる城下町の様子も、ずいぶんと分かってきました。

この若林城の南北ラインは真北から10度ほど東に振れています。そして、若林城の城下町もほぼこれと同じ方向性で作られているのです。この町割りの影響が、仙台駅近くにまで及んでいることをご存じですか？

仙台駅前を南北に走る愛宕上杉通を南に進むと、道はJR仙台病院付近で右にカーブし、五橋を通ってまっすぐ愛宕大橋の方へ伸びていきます。実は、このJR仙台病院付近から愛宕大橋付近までの道（清水小路）は、若林城の南北ラインとほぼ同じ方向性を持っているのです。

一方、JR仙台病院付近より北の愛宕上杉通（東五番丁）は仙台城下のメインストリートであった大町から新伝馬町へと延びる道筋（現在の中央通り）とほぼ直交しています。真北から約20度西に振れている、この東五番丁の方向性は、政宗が最初に作った仙台城下の方向性です。

つまり、JR仙台病院付近での道の屈曲は、政宗が作った二つの城下町、仙台城下と若林城下が出会った場所なのです。

仙台城下絵図（部分）　18世紀後半
（仙台市博物館蔵）

JR仙台病院付近の愛宕上杉通　平成25年7月撮影
手前が清水小路、屈曲の先は東五番丁

2 いにしえの川の流れ ― 古川

今泉清掃工場の東側に「古川（ふるかわ）」という地名があります。現在は「若林区今泉字古川」ですが、平成元年（1989）に仙台市が政令指定都市になる前の地名は「四郎丸字古川」でした。四郎丸と言えば、名取川を挟んだ対岸にも同じ地名があります。なぜ、名取川を挟んだ両側に四郎丸の地名があるのでしょうか？

その謎を解く鍵は、字名の「古川」にあります。もともと、この「古川」の場所は四郎丸と地続きで、名取川の南岸に位置していました。つまり、かつての名取川はこの地点で大きく北へ蛇行していたのです。しかしある時代（おそらく江戸時代半ばころ）、大雨で増水した名取川は流路を変え、「古川」の場所が川の北岸に取り残されてしまったのです。それを示すように、古い航空写真などでは「古川」を取り巻くような流路跡を見ることができ、今でもその痕跡の一部は水田として残っています。

もともと四郎丸だったこの土地は、名取川の流れが変わった後も長らく、四郎丸村として扱われていました。明治時代になっても、この地域の人たちは川を渡って、四郎丸が含まれる中田の学校や役場に通っていたのです。そして仙台が政令指定都市になった時、地域の区分が新たに見直され、「今泉字古川」となったのです。

昭和36年の古川付近　　部分にかつての名取川の痕跡がうかがえる
（国土地理院蔵）

文政の村絵図に描かれた古川周辺　19世紀前半
この頃にはすでに、名取川の流路は南に移っている
（仙台市博物館蔵）

3 地名に無いバス停 ― 荒井

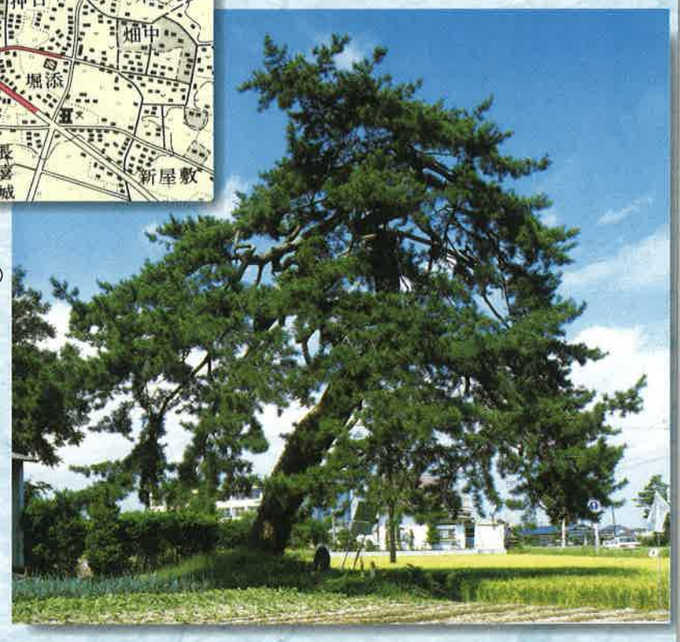
バス停の名前は、地域の地名や目立つ建物にちなんで付けられます。ですが、そうでない場合も少なからずあるのです。昭和60年代から進められた再開発事業により、イグネに囲まれた農家や畑、水田が広がる景観が一変した荒井地区に、そういったバス停をいくつか見ることができます。

荒井郵便局近くの「十文字」バス停があるのは、その名前から連想される十字路ではなく、東西にまっすぐに延びる道路沿いです。周囲にも「十文字」という地名はありません。実は、区画整理以前、道路はこの付近で南東に方向を変えており、その屈曲点に北西と東からの道が合流して、やや潰れた形の十字路になっていたのです。そこから、この場所は「十文字」という愛称で地元の人々に呼ばれたのですが、現在ではまっすぐになった道路によって、かつての十文字の姿はすっかり消し去られています。

七郷中学校近くの「一本松」バス停もまた、周囲に「一本松」の地名はなく、それらしい松の木も見当たりません。しかし、バス停のすぐ脇にはかつて、樹齢700年と推定される松の古木が、大きな枝を広げていたのです。仙台市の保存樹木に指定され、地元の人々にとっても地域のランドマークとして親しまれた松の古木は、平成9年頃に枯死してしまい、今はその面影をたどることもできなくなってしまいました。

荒井地区の開発は進みましたが、古い地名は今もなお使われています。しかし、新しい町名が付けられるのも時間の問題でしょう。失われたランドマークに由来するバス停の名前も、その終焉がすぐそこまで来ているのかもしれません。

昭和52年ころの荒井付近
　　部分の十字路が「十文字」の由来
（国土地理院発行2万5千分の1地形図より）



七郷の一本松　昭和63年ころ
（「杜の都の名木・古木」より）

施設探訪

東北学院資料室

長い幕藩体制が終わりを告げ、新しい価値観によって生きることが模索された明治時代。教育はかつてないほど、大きな意義を持つものとなりました。仙台でも新時代を担う人材を育成するために続々と学校が創られ、明治30年代後半には「学都仙台」と称されるほどになります。

東北学院の前身である仙台神学校が誕生したのは、そんな機運の先駆けとなる明治19年(1886)。その創設に至るまでの、そして明治・大正・昭和という激動の時代を背景に歩んだ東北学院の歴史を物語る資料を公開しているのが、東北学院資料室です。東北学院を創設した押川方義(おしかわまさよし)、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーに関わる資料を中心とする常設展示からは、単なる学校史というだけではなく、彼らの活き活きとした人物像や、当時の世相がうかがえます。

東北学院創設後、実業家、政治家と転身を重ねた押川の手紙や書類に見られる奔放な筆跡。その一方、ホーイが記録した会計収支簿の文字は几帳面で、東北学院創設時に支え合った二人の性格の違いが鮮明に浮かび上がってきます。また、昭和13年(1938)に亡くなったシュネーダーの葬儀を撮影した写真には、葬列を見送る多くの仙台市民の姿があり、35年にわたって東北学院院長を務め、仙台に長く暮らしたシュネーダーが、地元の人びとに親しまれていたことを伝えています。

このほか、仙台に暮らした外国人宣教師の当時の生活を垣間見ることができる、シュネーダーとその家族の写真や愛用の机や椅子。大正デモクラシーの実践的体現者として知られる杉山元治郎と鈴木義男をはじめとする東北学院卒業生の資料、そして東北学院に集った学生たちの学校生活を物語る資料の数々が並びます。

仙台に深く根を下ろした東北学院。その歴史を訪ねることで、仙台の歴史を新たな角度から眺めることができるでしょう。

手前の展示は、昭和20年の仙台空襲後、焼け跡から発掘された仙台神学校の礎石。奥に見えるのは、押川の資料を中心とした展示

院長辞任後、礼拝堂を出るシュネーダー夫妻 昭和11年

昭和7年完成のラーハウザー記念礼拝堂。外壁には秋保石が使われている

東北学院資料室

東北学院大学土樋キャンパス ラーハウザー記念礼拝堂地階

仙台市青葉区土樋1−3−1
TEL:022−264−6423

開室時間
授業期間中
月〜金　10:45〜16:00
土　10:45〜12:00
長期休暇中
月〜金　10:00〜15:30
※祝日にあたる場合は休室
※団体での見学は事前に連絡が必要

観覧料 無料

交通案内 地下鉄五橋駅より徒歩10分
駐車場なし

仙台市史　最新刊好評発売中!

第30回配本 通史編 9　現代2

◆オールカラー　A5判　635頁　◆定価3,000円(本体2,858円)

1960年代後半からの約20年——。
大都市へ、そして政令指定都市へと飛躍した仙台の軌跡を、懐かしさあふれる写真とわかりやすい解説でたどります。

◎次回刊行予定
特別編／地域誌
◎続刊予定
特別編／年表・索引

通史編／3,000円(本体2,858円)
資料編／4,000円(本体3,810円)
特別編／6,000円(本体5,714円)
※板碑のみ5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます

通史編 1原始 ※改訂版とセット販売になります　2古代中世　3近世1　4近世2　5近世3　6近代1　7近代2　8現代1　9現代2

特別編 1自然　2考古資料※完売しました　3美術工芸　4市民生活　5板碑　6民俗　7城館　8慶長遣欧使節

資料編 1古代中世　2近世1藩政　3近世2城下町　4近世3村落　5近代現代1交通建設　6近代現代2産業経済　7近代現代3社会生活　8近代現代4政治・行政・財政　9仙台藩の文学芸能　10伊達政宗文書1※完売しました　11伊達政宗文書2　12伊達政宗文書3　13伊達政宗文書4

県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申込みください。

発売元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181　FAX 022-235-7183
お問合せ先／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074

せんだい市史通信 第31号

発行年月日／平成25年9月13日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

このリーフレットはリサイクルできます。「雑がみ」へ分別しましょう。